

2021年3月7日  
東北大災害研 震災10年行事

# 災害支援としての 歴史資料保全を考える

佐藤 大介

(東北大学災害科学国際研究所・歴史資料保存研究分野)

# 「史料レスキュー」の現在



(撮影・斎藤秀一)



- 救出した個人所像の歴史資料 83件（宮城県石巻市32件など）
- ボランティア活動851日
- 従事者8044人（うち、市民5614人）
- 画像データ 60万ファイル
- 返却できた史料 25件（約30%）
- 出版した歴史叙述 12冊
- ボランティアを契機に結成された市民の古文書サークル 3
- 新設された史料保存施設 0

被災対応はもちろん、「地域の歴史再生」はまだ途上

# 3団体ーボランティアからの郷土史活動

- 被災後の日々の古文書の取り扱いによる関心と、専門家による指導を契機に、古文書サークルが複数発足した。古文書解読の成果の一部は公刊された。
- 甚大な災害により必然となった「長期間の市民ボランティア」。そこに参加した人々の営みは、「日常生活の中に、歴史を」という命題への、一つの道筋を示しているのかも知れない。



ボランティア作業終了後の古文書サークル  
(2013年2月撮影)

- 「効率化・最適化」では生まれない文化的営為
  - 「持続すること自体に意義」

# 「なぜ、災害時に史料レスキュー？」

- 2011年3月11日直後の宮城県山元町にて

「みやぎ史料ネット」から古文書保全の呼びかけをファックスで受け、避難所の掲示板に貼ろうとした。しかしそこには人命やライフラインに関わる掲示が多数。「場違いに思えて」、掲示を断念した。

(朝日新聞2020年12月27日宮城版「古代壁画を守れ10 震災の産物と記憶 次世代へ」)

なぜ、災害時に、史料レスキューが必要なのか？

歴史資料、歴史・記憶の社会における役割とは？

当事者の主観ではない「根拠」は？

# 「なぜ、災害時に史料レスキュー？」

- 2017年～18年にかけて宮城県石巻市で実施した連続歴史講演会参加者アンケートより
- 「失われてしまって、もう戻ることもないふるさとの先人の話がきけてとても良かったです。誰かがおぼえていて下さるといのはうれしいことです。」（2017年5月 50代・男）
- 「（塩田が）昭和26年まで続いていたのですか？父親世代から聞いていた、子供の頃に塩をかくして持っていき物と交換していたという話しはほんとうかも？と思いました。」（2018年3月 50代 男）



石巻市での連続歴史講演会（2017年2月）

\* アンケートは上山眞知子氏の監修で作成したものを、東北大学災害科学国際研究所研究倫理委員会での承認を得て実施した。本スライド内容での引用の責任は佐藤にある。

# 「なぜ、災害時に史料レスキュー？」

- 「自分ではないだれかが、ふるさとのことを覚えていてくれる」、「歴史をしつて、親世代の記憶を想起する」
- 史料レスキューの中で、このような「証言」は数多く得られている。「モノ」と「モノの語る歴史・記憶の保護」を越えて、災害を経験した人々に、なんらかの意味を与えているのではないだろうか？
- ただし、当事者の語りだけで、直接に「心の復興に資する」と評するのでは、十分ではない。

「なぜ、災害時に史料レスキュー？」

# 「心理社会的支援」

- \* 災害研歴史系教員・上山真知子、J.F.モリス両客員教員らによる、臨床心理学者との共同研究
- \* J.F.モリス「歴史資料保存と災害支援 歴史資料保存活動がなぜ、災害に強い地域づくりに貢献できるか」

<http://hdl.handle.net/10097/00129482>